

ミッション史料からみる珠江デルタ支流地域の地域社会

土肥歩

はじめに

第一章 花縣の概要とCVM

第一節 花縣の建置と地域的特徴

第二節 花縣へのキリスト教傳播

第三節 CVM傳道活動の概説

第二章 番禺・花縣の近代化の推移

第一節 徐茂均の來歴

第二節 徐茂均による教育機關建設とその背景

第三節 番禺・花縣における鐵道建設

第三章 徐茂均による地域社会の再編とCVM

第一節 治安悪化と清郷

第二節 徐茂均とCVMの「協力」

第三節 地域社会との軋轢

おわりに

## はじめに

二〇世紀初頭から辛亥革命前夜の中國社會において、立憲制の導入と地方自治制度の實施は、清朝中央がおこなった諸領域におよぶ近代化政策（光緒新政）の一つであった。江蘇省の事例を取り扱った田中比呂志の研究史整理によれば、近代化の受け皿は、上海の教育機關で學んだり日本留學で新しい政治知識を得たりした新しいタイプのエリートであったという。一九〇六年に清朝政府が立憲制導入を宣言すると、彼らは省議會の前身組織にあたる諮議局設置に積極的に參與し、「縣域を越えた地域エリート間の結集」をはかる。<sup>(1)</sup>そして、一九〇九年に城鎮郷地方自治章程が制定されると、官治補助としての自治組織が相繼いで結成されるようになる。この結果、縣を舞臺としたエリートが創出され、エリートによるネットワーク形成の第一歩となった。<sup>(2)</sup>二〇世紀初頭の地域社會には再編の波が押し寄せていた。

本稿で取り上げる廣東の地方自治をめぐる問題は、宮内肇の研究で多くが明らかにされてきた。宮内は、一九〇七年に結成された廣東自治研究社を取り上げ、同研究社が発行していた機關誌『廣東地方自治研究錄』を手がかりに、同研究社の構成メンバーには慈善團體としての性格を持つ文瀾書院出身者が數多く存在したことを指摘した。そして、清末の地方自治研究社は「傳統的な廣東社會の自治機關の上に存在していた」と結論づけた。<sup>(3)</sup>別の論考では、族譜を手がかりに、同研究社の成員が順德縣の有力宗族であった龍氏との婚姻によって人的關係を構築していたことを明らかにしている。<sup>(4)</sup>いずれも、廣東社會の自治機關が、近代的な地域秩序の形成に寄與したことが示されている。

しかし、既存の研究成果で課題とされてきた論點が少なくとも三點存在する。一點目は、従来の研究がエリート層を中心に論じられてきたことである。江蘇省では上海の教育機關での就學經驗や日本留學經驗をもつエリートたちが擡頭し、廣東省では傳統的な書院および宗族の影響力を背景にエリートが擡頭してきた。だが、そうした社會的背景を持たない人物（非エリート）が、どのように地域社會の再編に取り組んだのか、検討の餘地が残されていると言える。

二點目は、郷村地域へのまなざしである。これまでの清末のエリート層を扱った研究の大部分は、縣城もしくは省城など都市部が主たる舞臺となっていた。それゆえ、地域エリートが諮議局設置や地方自治の実施を通じて秩序形成をおこなっていたのと同時期に、郷村地域の非エリートが都市部で發生していた出來事にどのような反應を示したのか、もしくはどのように主體的な再編の動きをみせたのかという論點はさらなる検討が必要と思われる。

三點目は、史料の問題である。たしかに、地域エリートを取り扱った研究では、彼ら自身が残した記録や行政文書を用いて、諮議局や地方自治のあり方を論じることができた。しかし、郷村地域で何らかの社會の再編が行われていたとしても、そのような動きが中國語史料に記録されることは極めて少ない。すなわち、一點目と二點目の課題を克服するための史料が十分に存在しなかったのである。

しかし、三點目の課題解決の糸口となる研究アプローチとして近年注目されているのが、キリスト教傳道團體（以下、ミッションと略）が記録した報告書や書簡類（以下、ミッション史料と表記）である。従来のキリスト教史研究では、地域社會での傳道の推移を知るために用いられていたが、その記述の豊富さに注目した研究が進んでいる。たとえば、蒲豐彦は、潮州のイングリッド長老會ミッションやアメリカ・バプテストミッションの史料を用いて、一八七〇年代の地域社會の民衆と教會の關係を論じている。<sup>5)</sup> この研究は、教案を政治的イデオロギーの觀點で分析する従来の研究アプローチを相對化し、地域固有の枠組みから分析するという特徴を有している。また、この研究アプローチによって、市井に住まう無名の人びとに光が照射される可能性も格段に高まる。<sup>6)</sup>

本稿では、この研究アプローチに依據したうえで、徐茂均という人物に着目する。<sup>7)</sup> 後述の通り、徐茂均は花縣三華店村沙埒莊という珠江デルタの後背地に出生した。そして、青年期に出稼ぎ移民として出國し、北米で鐵道建設に従事している。ゆえに、傳統的な教育を受けた形跡はおろか、諮議局との關係もほとんど見られない。そのため、本稿の考察を通じて、一點目と二點目の課題に具體的な回答を用意することができるだろう。

本稿で用いているのは、一八九八年にニュージールランド長老會が結成した中國傳道團體「廣州鄉村傳道團 (Canton Villages Mission. 以下、CVMと略)」に關する史料である。一つはノックスカレッジ附屬長老會研究センターに所藏されている宣教師の報告書や書簡、評議會 (宣教師たちや中國人スタッフによる現地運營會議) の議事録であり、もう一つはオタゴ大學ホックンコレクションに所藏されているCVM宣教師ジョージ・マクニール (George Hunter McNeur) の日記である<sup>(8)</sup>。拙稿で指摘したとおり、CVMはニュージールランドにいる在外中國人と本國の家族・親類の間の私信や金銭の送金事業を通じて廣州周邊の鄉村地帯で傳道活動を行っていた<sup>(9)</sup>。しかし、從來の研究では花縣についての言及はほとんど見られない。ダルツェルの研究では、沙埗莊の牧師館が械闘や悪質な噂の蔓延によつて、一九一六年に撤去された事實を述べるが、花縣にCVMの活動地域が擴大した背景や活動實態については依然として解明の餘地を残している<sup>(10)</sup>。これは、ダルツェルの研究が中華民國期に限定されていたことと、CVMの宣教師たちと番禺縣出身のニュージールランドからの歸國華僑 (本稿では歸國者と稱す) との關係が注目を集めたためと考えられる。

以上、本稿の目的は、花縣三華店村周邊について記録したミッション史料を用い、鄉村地域において非エリートである徐茂均が同地域においてどのように社會の再編を行ったのか考察を加えることである。

なお、本稿の考察対象期間は、マクニールが廣州に到着した一九〇一年末から一九一一年の辛亥革命に至るまでの十年間とする。時期を十年に區切った理由は、辛亥革命勃發以降、鄉村地域の治安が極度に悪化し、狀況が大きく變化してしまうからである。そのため、一九一一年以降については今後の検討に委ねたい。

## 第一章 花縣の概要とCVM

### 第一節 花縣の建置と地域的特徴

本論を始める前に、まず花縣の建置と地域的特徴について確認する。CVMの活動據点となった番禺縣が秦代に成立した行政区劃であるのとは對照的に、花縣という行政区劃の成立は比較的新しい。番禺、南海、從化、清遠の各縣に圍まれたこの地域は、古來より「花山」と稱される山間地域だった。それゆえ、「賊黨」の巢窟としても有名だった。<sup>(1)</sup>明朝滅亡後に中國を統治した清朝もこの地域の治安状況を憂慮し、一六八二（康熙二十一年）年には總督と巡撫が大軍を動員して掃討作戦を行った。その後、一六八六（康熙二十五年）年に南海縣と番禺縣の圖甲を分割して縣を設置し、花縣と命名した。<sup>(2)</sup>本稿で取り上げる徐茂均の出生地である三華店村は縣南部に位置する小村で、徐姓が居住する單姓村落である。この村には、一九一一年（宣統三年）の段階で約九〇〇〇人が居住していた。<sup>(3)</sup>

花縣および三華店村の地域的特徴として本稿で着目すべきは、三點ある。一點目は、三華店村の徐氏とその西方に位置する畢村の畢氏とが少なくとも十九世紀から械鬪を繰り返していたことである。<sup>(4)</sup>三華店村出身の徐鎮益は、畢氏と徐氏との紛争について以下の四つの事例を挙げている。一例目は、市場町での畢氏による木材盜難をめぐる事件である。この時、盜難品を回収した徐氏と畢氏との間に衝突が発生し、畢氏側に死者が出ている。二例目は、「辛卯年（一八三一年もしくは一八九一年）」に畢氏が徐氏の墳墓がある丘陵地帯を占有した事件である。この事件では、徐氏側の紳士たちは畢氏と争うことがなかったため、三華店村の一部が畢氏に歸することになってしまった。三例目は畢氏が築堤によって水路を變更した事件である。これにより、徐氏は流路變更に多額の出費を迫られた。四例目は「戊戌年（一八三九年もしくは一八九八年）」に畢氏が用水路（原文「坡水」）を占有した事件である。徐氏はこれを縣衙に訴えたが、畢氏が金錢を用いて縣

衙に取り入ったことで、用水路は畢・徐兩氏で共有すべしとの判決が下された。<sup>15</sup> 徐鎮益は正確な日時を記録していないが、これによって三華店村が疲弊し、彼自身が「壬寅年」すなわち一九〇二年に發生した旱魃をきっかけにフランス領インドシナ聯邦（以下、佛印と略）への出稼ぎを決めたという記述から、畢氏と徐氏の紛争は一九世紀中の事例とみて間違いない。<sup>16</sup> この回想を一方的に信じることは出来ないが、徐氏と畢氏の度重なる械闘が發生していたことがうかがえる。第三章で論じるとおり、徐氏と畢氏は辛亥革命直後から械闘を繰り返すことになるが、これは一九世紀にまで遡ることができる。

二點目は、紳士たちによる地域支配が十分機能していなかったことである。たしかに、廣東の多くの地域においては、科擧の合格者が地域社會で權勢を振るい、祠堂の建設・族譜の作成・書院や義塾の整備を通じて地域社會を振興していたことが知られている。しかし、花縣では状況が異なっていた。中華民國期に編纂された『花縣志』によれば、清代の花縣における擧人合格者は四九人で、そのうち進士合格者は八人だったが、徐氏からは擧人・進士ともに合格者が輩出されていない。<sup>17</sup> これに對して、順德縣は、乾隆年間（一七三六―九五）と同治年間（一八六二―七四）だけでも、それぞれ二〇〇人、一三八人の擧人を輩出している。<sup>18</sup> ここから考えられるのは、花縣は科擧を通じた社會の上昇の可能性が相對的に低く、徐氏自體も傳統的な紳士を生み出す宗族ではなかったということである。洪秀全の科擧受験問題を論じた菊池秀明の研究に依據すれば、科擧合格に不可欠だった「著名文人との交友關係」や「有力な商業ネットワーク」が徐氏には缺落していたのだろう。<sup>19</sup> 先に述べた畢氏と徐氏の械闘において、徐氏の紳士たちが紛争調停に十分な機能を果たしていなかったという徐鎮益の指摘は、決して個人的な意見とは言い切れない。

三點目は、科擧による社會的上昇が望めない花縣において、海外に出國して財をなそうとした人物が多數存在したことがある。花縣の若者の多くは一九世紀中葉以降、東南アジアや北米に出國し、鐵道建設や雜貨商で生計を立てた後に歸國した。彼らの出國を後押しする背景となったのは、一つは一八五〇年代の太平天國蜂起や洪兵叛亂であり、もう一つは一八七〇年代から一八八〇年代に發生した自然災害であった。<sup>20</sup> 本稿で取り上げる徐茂均も、花縣に發生した叛亂や災害に

よって海外に出國した一人と考えられる。そしてそれは、花縣に生まれ育った男性としては一般的な人生設計だったに違いない。

以上から、三華店村周辺において一九世紀から徐氏と畢氏の械闘が續發していたこと、徐氏は科擧合格者の少ない宗族だったこと、花縣が海外移民の輩出地だったことが確認される。

## 第二節 花縣へのキリスト教傳播

では、この地域にはいつ頃から、どの教派がキリスト教傳道を始めたのか。管見の限り、CVM以前に花縣でのキリスト教傳道に着手したミッションは、ベルリン・ミッションとアメリカ長老會ミッションの二教派だけである。まず、この地域に初めてキリスト教が伝えられたのは咸豐年間（一八五〇―一八六一年）のことで、その教派はベルリン・ミッションだった。ベルリン・ミッションの宣教師は一八五〇年代に獅嶺尾村出身の馮水という人物が香港で洗禮を受けたのを發端として、この地域の客家系住民を對象に傳道活動を始めた。しかし、「光緒庚子年（二九〇〇年）」には、義和團戰爭の影響を受けて住民の排外熱が高まり、禮拜堂が暴徒による焼き討ちに遭った。<sup>(21)</sup>このため、同ミッションによる傳道活動は一時的に頓挫してしまつたとみられる。

續いて、アメリカ長老會ミッションが花縣にやつて來た。同ミッションが花縣に活動據點を廣げた時期は正確には分からないが、一八八〇年代初頭から一八九〇年代初頭にかけて番禺と花縣の客家居住地域にステーションを建設している。後にCVMに譲渡されるステーションの一つである福源水は、一八九一年から同ミッション宣教師ビーテイ (Andrew Beattie) によって活動が始められた。<sup>(22)</sup>しかし、義和團戰爭の影響を受けて排外熱が高まると、一九〇〇年七月には福源水の禮拜堂が移動中の兵士による掠奪を受けてしまう。同年九月には福源水西方の石龍墟にある禮拜堂が破壊され、現地信者數十世帯が掠奪の被害を受けた。<sup>(23)</sup>同ミッションが受けた被害に對しては清朝政府からの賠償金支拂いが決定した。しか

し、算定された被害額五萬二〇〇〇ドルは過多であるという役人側からの申し立てを受けて、そのうちの七〇パーセントの金額が賠償額になった。<sup>24)</sup>

以上、ベルリン・ミッシオンとアメリカ長老會ミッシオンのキリスト教傳道の經緯を確認する限り、一九〇〇年に發生した義和團戰爭の影響が同地域に影を落としていたことがわかる。次節で述べるとおり、CVMはアメリカ長老會ミッシオンから傳道地域を譲渡されて、番禺・花縣で傳道活動を開始することになった。CVMが活動を行う直前の状況から言えば、CVMにはこの地域の復興を託されたと言っても過言ではない状況だった。

### 第三節 CVMの傳道活動の概説

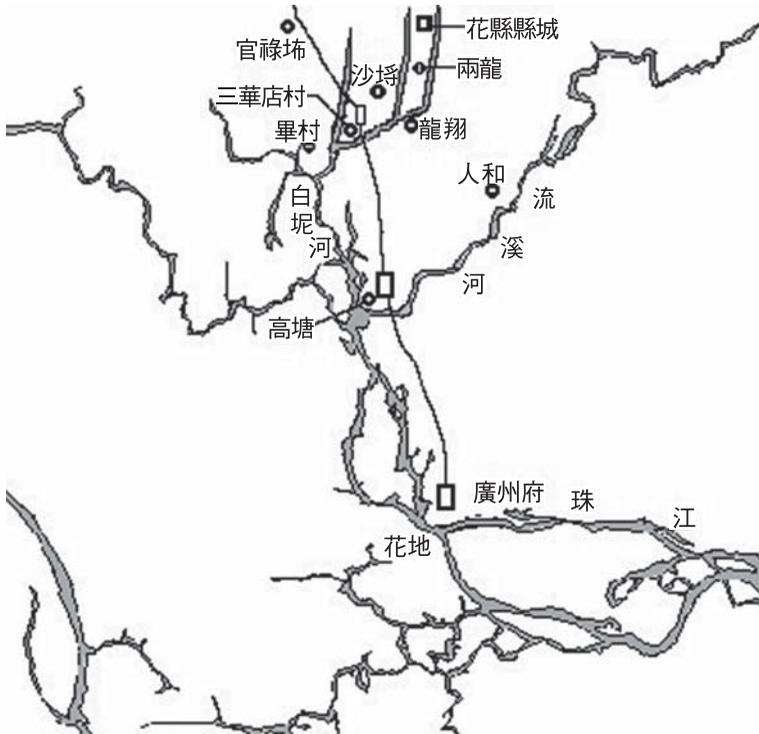
義和團戰爭によつて傳道活動が一時的に停滯した直後に、CVMの中國傳道が始まった。CVMは一八九八年、ニュージールランド長老會によつて設立されたキリスト教海外傳道のための組織である。<sup>25)</sup> このミッシオンが既存のミッシオンと大きく異なつていた點は、在外中國人と本國との間に形成されたネットワークを利用していたことである。CVMの創設者であるアレクサンダー・ドン (Alexander Don) 牧師は、ニュージールランド國內の内陸地域に住む中國人の歸國や中國との私信・金錢の送金に着目した。ドンは私信と金錢の受け渡しを代行することで、ニュージールランド國內における中國人への傳道と、中國の移民母村における傳道をおこなうことを提唱したのである。このとき、中國傳道の任務を任されたのが、マクニールである。彼は一九〇一年十月三十一日に按手禮を受けた後、一九〇一年一二月に廣州に到着し、同年末から番禺北部で傳道活動を始めた。<sup>26)</sup>

CVMによる傳道活動の轉機は、一九〇三年九月に訪れた。すなわち、アメリカ長老會ミッシオンが番禺北部と花縣における傳道地域の譲渡を決定したのである。<sup>27)</sup> この時、アメリカ長老會ミッシオンから引き継いだのは、番禺縣北部の慕德里司にある人和、花縣の福源水と龍翔墟にある三箇所のステーションであった。<sup>28)</sup> かくして、翌一九〇四年一月より、CVM

Mは番禺縣北部と花縣での傳道活動に着手した。

アメリカ長老會ミツシヨンから讓渡されたステーションを據點に福音傳道を行う傍ら、CVM宣教師たちは高塘における禮拜堂と病院の開設を計劃していた。そのため、一九〇四年から土地の有力者たちと土地購入をめぐる交渉が行われた。このとき、ニュージーランドから歸國し、キリスト教會に友好的な歸國者に助言を仰ぎつつ、土地交渉を開始した。しかし、彼らの支援をもつてしても、現地の地方官(巡檢司)や高塘を支配する紳士集團(十八社)から理解を得るのは難しかった。病院についていえば、一九〇七年には現地の仲介者の名義で土地を購入するが、契約書の内容について十八社が異議を唱えたため居住が先延ばしにされた。結局、高塘での病院の建設は一九〇九年五月になってようやく交渉がまとまった。<sup>(26)</sup>

アメリカ長老會ミツシヨンからの傳道地域の讓渡以降、CVMの人員もニュージーランドから逐次派遣された。一九〇三年一月には二人目の宣教師ウィリアム・モーンソン(William Mawson)とその妻、及びマクニユールの婚約者マギー・シンクレア(Maggie Sinclair)が香港に到着した。この後、マクニユールとモーンソンがCVMの中心となって、傳道活動と信者への教育活動が行われる。男性の宣教師と同時に、女性も傳道の一翼を擔う人員として期待されていた。教育活動に従事する人員として醫療宣教師のジョセフ・インクス(Joseph Ings)とその妻、さらにジェーン・モーンソン(Jane Mawson)女史とマーガレット・アンダーソン(Margaret T. Anderson)女史が派遣され一九〇五年十二月に廣州に到着した。しかし、インクスは高塘での病院運営に關與する前に東莞縣滯在中に重篤な赤痢にかかり、一九〇六年八月に急死してしまふ。<sup>(30)</sup>そのため、彼の教え子のジョン・カーク(John Kirk)が新たに派遣され、一九〇七年十月に廣州に到着した。一九〇九年には宣教師ハーバート・デービス(Herbert Davies)、アニー・マクエワン(Annie McEwan)女史、醫療宣教師エドワード・カーク(Edward Kirk)が派遣された。以上のとおり、一九〇四年に本格的な傳道活動が始まって以來、CVMのスタッフは年を追うごとに増員されていった。



参考地図：1900年代の番禺縣・花縣關聯地圖

典據：廣東省國土廳・廣東省地名委員會合編『廣東省縣圖集』（廣州：廣東省地圖出版社、1990年）とCVM宣教師データベースによる地図（Bert Davies, “Canton Villages Mission Districts,” 1909）より筆者作成。本圖では、列車驛などを可能な限り省略し、文中に登場する主たる地名の位置関係のみを示している。

なお、拜上帝會を結成した洪秀全に代表されるように、花縣は客家の居住地域として知られている。そのため、後にCVMの活動據點となる三華店村も客家の居住地域だったのかという疑問が生じる。これに關して、モーションは客家語と廣東語の相違を述べた上で、「花縣では、そのミッション（ベールリン・ミッション）がそれらの人びと（客家）を對象に活動し、私たちは本地の人びとを對象に活動している」と指摘する<sup>31</sup>。つまり、CVMの活動對象は花縣に居住する本地人だったことがわかる。これに加えて、三華店村や徐茂均と客家を關聯づけた中國語史料やミッション史料は確認できなかった。このため、CVMの宣教師た

ちは三華店村が客家地域であるとの認識を持つていなかったと本稿執筆時点では判断せざるを得ない。

## 第二章 番禺・花縣の近代化の推移

### 第一節 徐茂均の來歴

徐茂均についての體系的な記述は『新華鎮志』と『花縣華僑志』に見られる。兩文獻の記述を基礎として、中國語で公刊されている各種史料で補足すると、徐の經歷を次のようにまとめることができる。

徐茂均は、一八六〇年に三華店村沙埗莊に生まれた。家は貧しく幼くして兩親を亡くしたため、彼は生計を立てるために海外渡航を試みた。二〇歳のころに、カナダに渡航して鐵道敷設工事に携わるかたわら、現地で技術（原文…修理工程）を學んで、約二〇年を海外で過ごした。しかし、徐は中國の弱體化に心を痛めて歸國を決意した。<sup>(32)</sup> 彼が中國に歸國した正確な日時は不明だが、日清戰爭から二〇世紀初頭の間だったのではないかと推測される。

歸國後、彼が郷村で取り組んだ活動の一つとして「華僑義塚」の整備が挙げられる。前章で指摘したとおり、花縣は海外移民を輩出した地域としての一面があった。そのため、徐茂均は三華店村内の蛤蜊窩に「華僑義塚」を整備し、出國先から運ばれてきた引き取り手のない遺骨を埋葬する事業を行っていた。<sup>(33)</sup> 中國人の遺骨は、香港の東華醫院を経由して、廣東省各地の善堂や民間の醫療機關に引き取られ、故郷の埋葬地へと送られるというネットワークが存在していた。その際、身元不明や親族に引き取り手がいない遺骨は、東華醫院が設置した墓所（義莊）に安置される手はずになっていた。<sup>(34)</sup> 徐茂均の場合はそうした遺骨をも引き取っていたようである。ただし、ミッション史料ではこうした側面はほとんど觸れられない。

もう一つの活動は、近代教育の普及である。彼は早くから辮髪を切り落とし、纏足の禁止を説いてまわった。そして、

日新男子校、月新女子校という二つの學校を開設した。<sup>(35)</sup> 日新男子校は一九〇九年に「ドイツの宣教師毛順理（CVMの宣教師モーションと考えられる）」とともに建てられた。同校では白話文、そろばん、英語などの教育が施されると同時に、孫文が唱えた革命思想の宣傳が行われたという。男子學生が入學する際は、辮髪を切り落とさねばならず、女子學生が入學する際には、頭髪を耳元で切りそろえねばならなかった。<sup>(36)</sup>

こうした教育活動に携わる一方で、清末の革命黨の武装蜂起に參與していた事實も確認できる。一九〇九年に中國同盟會會員の徐維揚が同會の分會である「番花同盟分會」を組織すると、徐茂均もこれに加わった。一九一一年四月に兩廣總督を標的とした黃花崗起義で徐は先鋒隊の一員となり、徐維揚とともに廣州城の兩廣總督の衙門を襲撃する。しかし、武装蜂起は失敗し、徐は窮地を脱して三華店村に逃げ歸った。<sup>(37)</sup>

徐茂均はその後、華僑の資本を集めて大安公司を創設したり、新街の列車驛附近に新民埠を建設したりと、地域社會の經濟振興に努めた。一九一四年には、廣花公路の建設に着手するものの、廣東都督龍濟光に對する討伐作戰に参加して失敗したことが原因となり、佛印への逃亡を餘儀なくされた。<sup>(38)</sup>

徐茂均がいつごろ中國に戻ったかは明らかではない。しかし、一九二一年ごろには中國國內に戻っていたようである。なぜなら、彼はこのとき郷里において公益新村の建設に着手しているからである。翌年の一九二二年二月には、花縣共產農團の設立を宣言した。そして、公益新村にある土地を公田・私田を問わず全て公有に歸し、全村民を共產農團の成立大會に参加させた。この大會ののち、徐茂均は彼が所有する全ての土地を提供して、「公共農場」を經營した。また、同村にあった「同德會（キリスト教會の基金會）」のもつ十數畝のライチ園の土地を「公益工場」にした。<sup>(39)</sup>

國共合作が成立すると、徐は一九二五年に公益村とその周邊に農民協會を成立させ、自衛軍を編成した。しかし、一九二七年の四・一二クーデタにより、労働運動支持者に對する取締が強化されると、一九二八年二月に國民黨の搜索を受ける。徐は香港を經由して佛印へと逃れざるを得なかった。その後、中國に戻り、一九三〇年に廣州で病死した。<sup>(40)</sup>

以上を整理すると、まず一つ目に、彼は清末に中國に戻り、華僑義塚の整備と教育活動の振興に着手したこと、二點目に、その一方で革命運動や龍濟光討伐作戦などに加わったこと、三點目に、共產主義思想に傾倒し、花縣共產農團を成立させたことが確認される。しかし、従来の中國語で公刊された彼や花縣に對する記述にはキリスト教ミッションに關する若干の記載があるものの、その大部分が史料に依據した情報とは言えない。同時に、諮議局との關聯性も見出すことはできない。

CVM宣教師の記録に徐茂均が現れるのは、一九〇四年二月二日の午後である。マクニールの日記は次の事實を書き留めている。まず、徐茂均は數年前にニューヨークから歸國した「洋装をまとった花縣の人物」であり、「まだ洗禮を受けておらず、決まった目的を持たずに暮らしている人物のようである」。そして、マクニールに對して禮拜堂を故郷につくって欲しい、と依頼した(Feb. 21, 1904)<sup>(41)</sup>。しかし、この時CVMの傳道活動は緒に就いたばかりだったため、この依頼に應じることはなかった<sup>(42)</sup>。次にマクニールの日記に彼が現れるのは、第三章で詳述するとおり一九〇六年四月のことである。その間、彼がどのような社會の變化におかれて、どのような行動を取っていたか、宣教師たちは見聞というかたちでしか記録を残していない。しかし、光緒新政にもなつてこの地域にも訪れた「近代化」の足音に耳を澄ませば、徐茂均の置かれた状況がある程度浮き彫りにすることが重要であろう。

## 第二節 徐茂均による教育機關建設とその背景

この地域の「近代化」の足音は、教育機關の設置としてまず訪れる。徐茂均による教育機關設置について時系列で整理すると、次のようになる。まず、徐が海外から歸國したのち、一九〇三年に沙埭莊に男女共學の學校を開いた。當初は二〇人の學生が入學したものの、周邊の鄉村地域から運営資金を募ろうとしてうまくいかなかった<sup>(43)</sup>。次に、一九〇四年ごろにアメリカ長老會ミッションから洗禮を受けると、西關(省城外西部の繁華街)に私立の學校を開き、學生たちに英

語を教えていた。<sup>(44)</sup>そして、一年ほど廣州で教育活動に携わったのち、一九〇五年に彼は三華店村に戻る。<sup>(45)</sup>これを機に一九〇三年から開設している學校の運営を本格化させたのだろう。一九〇五年の開校当初には多くの學生が入學を希望したが、徐の教育内容があまりにも「進歩的 advanced」だったため、子弟の両親からの反撥を招き、在學生は大幅に減少してしまった。しかし、彼は挫折することなく残った學生と自分の娘たちに向けて授業を行った。その結果、「行われた活動は自信が呼び起こされるものであったため、二年目には學生の急増をみた」。徐茂均が保護者に提示した入學條件は、キリスト教徒になることと辮髪を切ることであったが、一九〇六年には入學生が増加に轉じたという。<sup>(46)</sup>

このとき、注目しなければならないのは、なぜ一九〇五年に一時減少した學生が、一九〇六年に増加したのか、という疑問である。もちろん一九〇五年に科擧が廢止されたことは、その最たる理由のように思える。しかし、當時の状況を考えれば、短期間で入學希望者が減少から増加に轉じた要因を二つの側面から説明できる。

一つ目は、反米ボイコット運動におけるキリスト教界の言動である。一八八二年にアメリカで施行された排華法案の延長が一九〇四年に決定されると、一九〇五年五月から數箇月間にわたって中國各都市の商人團體を中心にアメリカ製品のボイコット運動が展開された。<sup>(47)</sup>ボイコット運動の意義について、吉澤誠一郎は清末において「移民問題によって愛國の觀念が廣く流通させられた」ことと、新聞による情報発信や商會同士の情報交換によって本籍地を越えた愛國主義が形成されたことを指摘している。<sup>(48)</sup>

ただし、ボイコット運動の中で宣教師や中國人信者が果たした役割も大きかった。廣州においても、キリスト教會と反米ボイコット運動の關係は新聞記事に多數掲載されている。まず、城内のキリスト教會の學校で行われた定期演説會で、中國人學生がアメリカの華工入國禁止問題について取り上げ、宣教師を批判したり、<sup>(49)</sup>中國人の牧師や宣教師たちが會議を開き、排華法案を撤回するように求めた請願書を作成した上で駐清公使と駐米公使に提出したりといった動きが、逐一掲載されていた。<sup>(50)</sup>これはライアン・ダンチが取り扱った福建省福州の事例でもみられたことである。<sup>(51)</sup>

中國におけるキリスト教界の對應について、『廣東日報』には次のような投書が掲載されている。それによると、アメリカの政治家と「宗教家」には區別がある。前者の政治家は國家の權利を守る立場にあり、そのために華工入國を禁じている。しかし、後者の「宗教家」は「隣人を自分のように愛しなさい（マルコによる福音書第十二章第三十一節）」という精神を持って、中國人によるボイコット運動にも同情を示している。こうした姿勢に對して私は尊敬の念を抱いている。<sup>52</sup>この投書は、ボイコット運動における社會一般の人びとのキリスト教界に對する評價の一端と考えて良いだろう。「宗教家（この投書では宣教師や在米の中國人信者も含まれていた）」は愛國主義の點で評價されていたのである。

もう一つは、官立學堂設置の不首尾である。一九〇四年に奏定學堂章程が施行されると、花縣でも高等小學堂、初等小學堂の建設が試みられていた。<sup>53</sup>しかし、同時代の花縣での官立學堂設置狀況については否定的な見解が多い。たとえば、マクニールは兩龍墟で花縣知縣が寺廟を壊して「高等學校（學堂）」を建てようとしたために、混亂が発生したことを傳え聞いている（Dec. 3, 1905）。徐茂均も、學堂の教員二人が兩龍墟で「ころつきに殺されたことを指摘している。<sup>54</sup>さらに、花縣全體を通じて、學堂が縣城や各郷につくられたものの、「經費を準備するのが難しく、開校したり閉鎖したりするところが甚だしかった」。<sup>55</sup>すなわち、一九〇四年から一九〇五年にかけて花縣全體で學堂設置は十分に進んでいなかったのである。

以上の議論から、一九〇六年になって徐茂均の學校に入學者が増え始めた背景を次のように説明できる。まず、反米ボイコット運動で中國のキリスト教界がとった「愛國」的言動への評價が鄉村地域にも波及していた。次に、花縣における官立學堂設置が停滞していたため、すくなくとも三華店村周邊では、徐茂均の私設學校へと關心が向けられた可能性を指摘できよう。もちろん、ローレンス・ケスラーが紹介した江蘇省江陰の事例でみられたように、科擧廢止を契機として鄉村地域のミツシヨンの教育機關への入學希望者が増加したことは事實であろう。<sup>56</sup>ただし、これに加えて、花縣では學堂設置にも問題もあったために、徐茂均の私設學校に人びとの注意が向けられたと説明する方がより正確だろう。

## 第三節 番禺・花縣における鐵道建設

教育機關の普及と並行して、この地域の「近代化」を象徴するのは、番禺北部と花縣を通過して湖北省まで通じる粵漢鐵路の建設である。

まず、列強による中國分割が進む一八九八年に、アメリカの合興公司が粵漢鐵路建設のための借款權を手にした。そして、同公司が鐵道を建設し、借款返済後に中國自身が鐵道を管理することが取り決められた。さらに、一九〇〇年の粵漢鐵路借款續約では、四千萬ドルの貸し付けが認められた。しかし、續約締結後に合興公司は持ち株の三分の二をベルギーの東方萬國公司に譲渡し、一九〇四年に東方萬國公司の手によって粵漢鐵路の支線三水鐵路が建設された。ここで、アメリカ側の取り決め違反をめぐり、湖北、湖南、廣東の三省の紳士・商人たちが粵漢鐵路の利權回収の聲を上げた。結局、アメリカ合興公司は一九〇五年八月に續約を破棄し、一九〇六年四月に廣東粵漢鐵路有限公司が発足した。<sup>57</sup>その後、一九〇七年から同總公司によって敷設工事が再開され、同年七月には高塘附近の江村に、翌一九〇八年二月には花縣の新街村、同年三月には三華店村と大逕橋、同年五月には軍田まで鐵道が開通した。そして、同年九月には清遠縣の銀盞坳まで開通した。<sup>58</sup>

しかし、鐵道建設は廣州府北部の郷民たちの反撥を招いたことも事實である。たとえば、路床敷設のために高塘・人和に測量にやってくる外國人に反撥し、周邊の郷民は渡船の操業を停止している。<sup>59</sup>また、高塘附近の郷村にある橋梁の撤去や河川埋め立てに反撥し、郷民は聯日大砲を並べて、もし工事が繼續されれば發砲すると威嚇したりしていた。後者では番禺縣令が現地に赴いて再度の實地調査を行う事態にまで至っていた。<sup>60</sup>鴨湖の茶館で休憩を取っているマクニールとモーションが「鐵道の惡魔」ではないかと詰め寄られる場面もあった。<sup>61</sup>二人は鐵道工事にやって来た外國人技師に間違っていたものと推測される。CVMの活動地域となっていた高塘にも鐵道が敷設されることになっていたため、排外熱は宣

教師たちにとって深刻な問題だった。

番禺縣の郷民たちの不満に混じって、三華店村の郷紳たちの様子が新聞に掲載されている。それによると、花縣出身の附生徐炬熒たちは粵漢鐵路の線路敷設工事の變更で被害を被っている旨を、兩廣總督岑春煊に報告したという。これに對して岑は、郷民が田廬・墳墓・出入り道に不都合があるというのは事實かどうか實地調査に基づいて工事をするという「請願（原文：輿情）」に従うかどうか、關係部門が花縣および外國人技術者とともに精査してから、判斷を下すべきだとした。<sup>(62)</sup>「請願」という言葉から分かる通り、岑は鐵道敷設に對して不満をもつ要求に敏感に對應しようとしていたことがうかがえる。

ただし、傳統的な紳士たちの反對意見とは異なる意見も存在した。すなわち、番禺縣、花縣、清遠縣において利權回收運動を支持する聲が上がっていたのである。<sup>(63)</sup>徐茂均自身も鐵道利權の回收に贊同し、それによって利益を得た一人だっただろう。後年のCVMの記録によれば、一九〇八年に徐茂均が「鐵道建設」のために長期閒沙埗莊を不在にしていたことが記されている。<sup>(64)</sup>これはちょうど花縣に粵漢鐵路が開通した年にあたる。第一節で觸れた通り、徐はカナダで鐵道の建設員として長年働いていた。そのため、過去の經驗を活かし鐵道建設を指揮していたものと推測される。

さらに興味深いのは、花縣知縣と徐茂均の間に交わされたやりとりである。知縣が、徐が鐵道敷設の業者と土地所有者との間の紛争調停について役割を果たしたことに觸れると、徐は、この鐵道問題を端緒として彼の郷村において「公共的な精神 public spirit」と「より良自治 better self-government」を創出するための様々な計劃を話した。<sup>(65)</sup>徐は鐵道敷設を通じて生じた地域の争いを仲介しながら、地方官にも一置かれる存在として頭角を現したものと考えられる。

### 第三章 徐茂均による地域社會の再編とCVM

#### 第一節 治安悪化と清郷

前章で述べたように、徐茂均は愛國主義の波及や官立學堂の未整備を追い風として教育機關運営を軌道に乗せる一方、鐵道建設に參與する過程で地域社會における存在感を高めていった。ダンチの研究では、反米ボイコット運動を契機として中國人信者のエリート層がアヘン取締を標榜する拒毒會を創設し、社會改革に積極的に參與したと指摘されている<sup>(66)</sup>。鄉村での教育活動が順調に推移すれば、徐茂均の營爲も福州の事例に聯なる可能性があつた。しかし、花縣を訪れた近代化の足音は、治安悪化によってその歩みを一時止めてしまう。

そこには廣西省の狀況が深く関わっている。そもそも、一九〇二年頃から廣西省では活潑化した游勇（除隊兵士）や會黨による叛亂が深刻化していた。そして、一九〇四年六月には招撫を受けた游勇の陸亞發が武裝蜂起を行い、柳州城を數日間占領してしまつた。陸亞發らは近隣の山間部に立てこもつて政府軍と戦火を交えるが、一九〇四年十二月に鎮壓された<sup>(67)</sup>。叛亂鎮壓を指揮した兩廣總督の岑春煊は、一九〇五年十月に、朝廷に對して廣西省での叛亂鎮壓作戦が終了したことを報告している<sup>(68)</sup>。しかし、この叛亂鎮壓のために數多くの政府軍が廣西省に派遣されたことで、留守になつた廣東の鄉村地域における治安が著しく悪化していた<sup>(69)</sup>。他方、清朝中央も廣東における治安悪化を憂慮し、岑春煊と廣東巡撫の張人駿に對して廣西省での軍務終了後、即座に廣東省内で清郷を行うように催促している様子が見受けられる<sup>(70)</sup>。

廣東地域の治安を安定させるため、岑春煊は一九〇三年から一九〇六年にかけて清郷に着手した。彼は廣東各屬の勇營を再編し、東、西、南、北、中の五つの地域で匪賊や祕密結社の掃討作戦を行った。このとき「中路」に分類された廣州府周邊において、政府軍は治安が悪化した地域で、約二九〇〇名を拘束した。この人数は「西路」に分類された肇慶、陽

江、羅定、高州、廉州、欽州一帯で拘束された約五五〇人に次ぐ多さだった。<sup>(71)</sup>

「中路」清郷の様子について、マクニールは次のように語っている。郷村での傳道活動中、三合會が各地の郷村を襲撃する噂が流れた。しかし、ちょうどこの時に政府軍がやって来て清郷を行った。そして「この地域は私が往来していた（これまでの）五年間より安心できる状況だと信じている」とする。<sup>(72)</sup> 清郷はその後も繼續して行われ、高塘や花縣で數多くの匪賊が處刑されたといふ。<sup>(73)</sup>

實は、徐茂均とマクニールの二年ぶりの再會は、この清郷と時を同じくしていた。一回目は、四月であった。徐が廣州府對岸にある花地で行われた禮拜に現れてマクニールに挨拶をすると、マクニールは二年前に會つた徐のことを思い出した（Apr. 12, 1906）。二回目は、五月である。マクニールらが龍翔の禮拜堂で説教を行っている、徐は一四人の教え子を聯れてやって来た（May 31, 1906）。そして、三回目は六月である。この日、徐茂均は廣州を訪問し、マクニールに面會を求めた。彼は、村にペストが蔓延し、學校が一時的に閉校に追い込まれたことを報告した。さらに彼は、Park Po Fai（不明。花縣にある郷村か）で三合會と政府軍との戦鬪が繰り廣げられ、兵士側に四〇人の犠牲者が出たことや、兩龍で運營していた新式學堂の教師二人も三合會の犠牲となったことを告げた（Jun. 15, 1906）。この戦鬪とは、清遠縣からやってきた一〇〇〇人の祕密結社メンバーが兩龍墟と龍潭墟で掠奪を行い、政府軍に鎮壓された事件と思われる。<sup>(74)</sup> 徐茂均は、マクニールに對して花縣で行われた清郷の様子を傳えたのだろう。

「清郷とは召集された軍隊の盜匪に對する一種の戦争」だったという何文平の指摘は正しい。<sup>(75)</sup> しかし、清郷のため召集された軍隊が無實の民衆を聯行したり、掠奪を行ったりする狼藉への懸念が地域社會に共有されていたことも事實である。<sup>(76)</sup> 庶民の視點に立てば、匪賊の猖獗であれ政府軍の清郷であれ、日常生活を脅かす存在であることに變わりはなかった。沙埗莊もこうした被害に遭い、一時的な學校閉鎖に追い込まれたのである。マクニールやモーションが、政府軍による清郷を樂觀的に認識していたのに對し、徐茂均らは清郷による地域の荒廢を悲觀的に認識していたのである。これに追い打ち

をかけたのがベストの蔓延だった。<sup>(79)</sup>

この後数箇月して、マクニユールたちが初めて沙埤荘を訪問する。マクニユールの日記と日刊紙の記述からは、CVMと徐茂均の接点は疫病の蔓延、祕密結社の猖獗、そして清郷による地域社会の荒廢であったということが確認される。官の対策はかえって治安を悪化させる要素を含み、大きな限界をはらんでいた。そこに改めて登場し、地域の再編に關わろうとしたのが徐茂均であった。

## 第二節 徐茂均とCVMの「協力」

マクニユール夫妻は一九〇七年五月に休暇のためにニュージーランドに歸國する。この間、徐茂均は、一九〇七年四月に花縣横潭墟でCVMの禮拜堂建設のために土地と店舗を購入したり、一九〇八年中旬にモーンソンの傳道活動に協力したりしていた様子が見られる。<sup>(81)</sup>このようにCVMは徐茂均と密接な關係を構築していくなかで、一九〇八年初頭から三華店村における學校建設を進めていた。

これまで見てきた通り、徐茂均は一九〇三年に沙埤荘に男女共學の學校を運営し、自身が校長として學生・兒童に教育を施してきた。そしてさらに、中等教育のために學生・兒童を省城まで通學させる必要がないように、男子校と女子校の建設を計劃していた。當初、徐は建設にかかる費用一五〇〇ドルの全額負擔を豫定していたが、資金が不足してしまった。<sup>(82)</sup>そのため、CVMからの經濟的な支援をモーンソンに求めた。<sup>(83)</sup>それは、CVMが學校の建設費用を半額負擔するのであれば、宣教師の住宅用地購入を手傳うというものだった。<sup>(84)</sup>

CVMの宣教師たちが三華店村と沙埤荘における傳道活動の端緒を探ろうとして話し合いをすすめているさなか、徐茂均は學校の建設作業を進めていた。そして、現地宣教師たちの強い要望をうけ、ニュージーランド長老會海外傳道委員會は、一九〇九年春に沙埤荘の學校建設に對して七五〇ドルの資金據出を決定した。<sup>(85)</sup>

以上の経緯を経て、一九〇九年三月に三華店村に日新男子校が開校した。同校には一九〇九年度に五〇人が、一九一〇年度に四五人が在籍していた。<sup>(86)</sup> 教育機關の整備にともない一九一〇年からはモーション夫妻が三華店村に常駐して傳道活動を行うことになる。徐茂均は宣教師や女性スタッフの住宅用地の提供を申し出ている。<sup>(87)</sup> ちょうどこの時期に、女性教育を目的として、三華店村に婦女教育施設（月新女子校）が開設された。<sup>(88)</sup>

ニュージーランドの研究者レベッカ・ウィアーは、辛亥革命後のミッション史料を用いて「一九〇三年（正しくは一九〇九年）にCVMが花縣沙埭莊で初めて學校をつくった」ことは、現地信者とCVMの「共同事業（joint undertaking）」であったとする。<sup>(89)</sup> この指摘は極めて示唆的である。なぜなら、同時代の史料において、モーションも「現在、彼が我々の協力〔co-operation〕を求めているのは、この〔男女共學の〕學校の効率性を發展、増加させるためなのです」と傳道委員會に説明しているからである。換言すれば、CVMの三華店村での傳道活動は、現地信者との「協力」という形式で學校運営を行っていたのである。<sup>(90)</sup>

だが、徐が抱いた構想はこれにとどまらなかった。彼は、三華店村での病院の建設を模索していたのである。これは、かつて徐茂均が醫學を勉強し、當時蔓延していたペストなど疫病に對處しようとしたためだろう。<sup>(91)</sup> 徐茂均は、高塘の病院を運営していたカークに對して、病院を建設してくれるのであればCVMに對して土地を提供すると持ちかけている。<sup>(92)</sup> マクニユールに對しても、もしCVMが沙埭莊に病院をつくるのであれば、一〇〇〇ドルを支拂うと申し出ていた（Dec. 24, 1909）。<sup>(93)</sup> しかし、沙埭莊における病院建設計劃は實現しなかった。なぜなら、高塘での病院經營に重きを置いており、沙埭莊での病院の開設には見通しがつけれないというのがCVM側の意見であったからである。<sup>(94)</sup> このため、徐茂均はこの計劃を保留することになった（Oct. 1, 1910）。<sup>(95)</sup>

本節で論じたとおり、CVMに協力を求めて學校を開設した點と、宣教師たちに醫療機關建設を働きかけたという點からは、徐が宣教師たちに交換條件を提示しながら、地域社會の再編を行おうとしていた事實が浮かび上がってくる。いわ

ば、CVMの傳道活動と「協力」関係を維持しながら、徐は地域の再編に着手していたのである。

### 第三節 地域社會との軋轢

CVMと徐茂均の「協力」関係のもとでキリスト教系の教育機關が三華店村に創設されると、三華店村とその周邊におけるキリスト教の存在感は確實に高まっていった。

それを如實に示すのが、沙埭莊における洗禮希望者數である。マクニール夫妻が一九〇八年末に休暇を終えて廣州に戻り、一九〇九年初頭から郷村での傳道を再開すると、徐茂均はマクニールに對して洗禮希望者に試験を課すように要求した。そして、マクニールは沙埭莊で短期間のうちに三十五人に試験を課した。これは、CVMの傳道活動始まって以來、最多の洗禮希望者數であった (Jun. 20, 1909)<sup>(96)</sup>。同年中、人和での洗禮希望者數が合計六人だったことを考えれば、沙埭莊における洗禮希望者數の多さは突出している (Sep. 19 & Dec. 19, 1909)。マクニールは徐の性急な要請に對して、「急がば回れ」がここでは當てはまると説明した<sup>(97)</sup>ほどである (Jun. 14, 1909)。もちろん、全員が洗禮を受けたわけではないが、三華店村とその周邊においてキリスト教會に押し寄せる民衆は明らかに増えていた。

その一方で、キリスト教の存在感が増すことよって民教對立も先鋭化していた。徐はマクニールを聯れて三華店村の近くにある Fu Leng 村に行くと、三合會への加入を強要されている中國人信者數人を紹介した。信者數人は、收穫物を盗まれたり果樹を切り倒されたりといった被害を受けていた。マクニールは、「外國人の干渉は全くもって賢明ではないと説明」し、三合會と信者とのトラブルへの介入を敬遠していた (Oct. 2, 1909)<sup>(98)</sup>。しかし、兩者の對立が收束する氣配はみられなかった。翌年には男性信者 Tsui Lau の家屋が三合會のメンバーよって破壊され、顔を毆打されていたからである。明らかに、事態はエスカレートしていた。このとき、マクニールは「明らかに Ah Lau (Tsui Lau) に一部の非があった」として兩者の對立に慎重な姿勢を見せている (Mar. 26, 1910)<sup>(98)</sup>。

Tsin-Lauはおそらく徐茂均の同族と思われるが、この対立が解決したかどうか記録は残されていない。しかし、この一件に關してマクニユールが徐に對して縣衙に被害を届け出るようにと告げていることから、宣教師であるマクニユールが民教對立から距離を取る一方で、地域の有力信者である徐茂均が民教間の對立を解消しようとしていた様子がかがえる。いずれにせよ、この事件はマクニユールが認知する限り、三華店村附近で初めて發生した民教の對立であつた。換言すれば、民教對立はCVMの花縣傳道を契機として引き起こされたものとも推測される。

そして、洗禮希望者の増加と民教對立の發生を経て、三華店村および沙埭莊とその他の地域社會との間で軋轢が發生した。その發端となつたのは、CVMと徐茂均が「協力」關係のもとで創設した學校である。モーソンの報告によれば、一九一〇年度に四五人在籍していた日新男子校の生徒數は、一九一一年になると二八人にまで減少したという。彼は、この原因を沙埭莊から「一マイルほど離れた場所」に學校が二箇所つくられたためであると分析する。そして、「徐茂均のキリスト教教育があまりに活潑だつたため、彼ら〔異教徒の兩親たち〕は、子弟は古いやり方で教育されるべきだ」という觀點から、警戒してすぐに二つの儒教の學校を開いた」と描寫している<sup>(10)</sup>。

ここで注目すべきは、辛亥革命直後の一九一二年から一九一六年の五年間で、三華店村は三回の械鬪を経験した、という事實である。一件目は一九一二年三月の徐氏と「敵對する宗族〔原文：the opposing clan〕」との間の械鬪で、二件目は一九一三年秋の徐氏と畢氏の水利權をめぐる械鬪であつた<sup>(11)</sup>。三件目は一九一六年に黃氏と畢氏の械鬪に徐氏が介入し、畢氏の建物に焼き討ちを行った<sup>(12)</sup>。モーソンは「一マイルほど離れた場所」や「敵對する宗族」について具體的な言及を避けているが、第一章で言及した徐氏と畢氏の確執と辛亥革命直後の械鬪の推移を考えれば、モーソンは徐茂均らの行動に不信感を募らせる畢氏の存在を察知していたと言える。すなわち、CVMと徐茂均の「協力」關係は、畢氏との軋轢を深める一因となつたとも指摘できる。

義和團戰爭以降、アメリカやイギリスは自國の宣教師が地域の官府に赴いて訴訟に關與することを禁じる布告を出した<sup>(13)</sup>。

これは宣教師の庇護を求めて民衆たちが入信し、キリスト教會が地域社會の對立に巻き込まれるのを未然に防ぐためであった。マクニールも民教の紛争を解決するために、徐茂均のような有力信者を仲介して對立を回避しようとしたのである。しかし、この地域で周邊郷村との對立を顕在化させる一因となったのは、徐茂均が歸國以來、心血を注いで運営につとめた學校の存在であった。

### おわりに

本稿での考察を通じて以下四點が明らかになった。

一點目に、花縣南部に位置する三華店村は、十九世紀以來の隣村畢氏との械鬪、紳士による地域秩序形成の薄弱さ、そして出稼ぎ移民の輩出地域という性格を持っていた、ということである。本稿の主人公である徐茂均が海外へと渡航したのもこうした地域的性格に規定されたものと推測される。

二點目に、三華店村に押し寄せた二〇世紀初頭の近代化の波を背景に、徐茂均が地域社會で頭角を現したことである。一つは、沙埕莊における教育機關の建設である。反米ボイコット運動を通じたキリスト教會への評價と、花縣における官立學堂の整備不順から、彼が運営するキリスト教主義の教育機關は人びとの注目を集めた。もう一つは、粵漢鐵路の建設作業である。三華店村附近に鐵道が通じ、建設作業に従事することで、徐は經濟的に地位を高めていったと思われる。

三點目に、治安悪化、それに伴う政府軍による清郷、そして疫病の蔓延のために、徐茂均がCVMと接点をもったことである。三華店村の被害状況は史料からは明らかではないが、すくなくとも治安の悪化によって徐茂均の取り組みが停滞したのは確かである。<sup>16)</sup>そのため、徐はCVMの人的・經濟的「協力」を取り付け、相繼いで日新男子校と月新女子校を創建し、地域の再編を加速化させることに成功した。

以上二點目と三點目に關して言えば、清末の諮議局設置や地方自治導入と同時期に、非エリート層による地域の再編が

行われていた事実が確認される。既存の廣東地域のエリート研究と比較した場合、共通点は、鐵道利権回収への関わりを通じて、徐茂均が都市部のエリートと問題意識を共有していたことである<sup>(10)</sup>。一方、相違点としては、傳統的な廣東紳士のグループに加わらなかったこと、キリスト教を背景として地域の再編を行ったこと、そして、彼の取り組みが三華店村周邊に限定されたことであった。

そして四點目に、三華店村におけるキリスト教會を背景に行われた近代化が、近隣の郷村との軋轢を生み出したことである。義和團戦争以降、英米の領事館が宣教師の訴訟關與を禁止したことを背景に現地の有力信者が對立の仲介を行った。しかし、三華店村の事例では、CVMと徐茂均による教育機關の設置を背景として、地域社會内部の對立が惹起されることになった。

この點に關して言えば、徐氏と畢氏の對立構圖は、海陸豊を事例とした蒲豊彦の研究で指摘されている「械鬪的構造」に類似した性格を持つといえる<sup>(10)</sup>。換言すれば、徐茂均によるCVMとの「協力」關係によって高められた地域社會における緊張關係は、十九世紀以來の畢氏と徐氏の「械鬪的構造」に合流し、辛亥革命以降に地域社會の荒廢を招く一因になったと推測される。

今後の研究では、辛亥革命以降に三華店村と畢氏の間で發生した械鬪とキリスト教の關係、および徐茂均による共產農團創設について明らかにする豫定である。

## 註

- (1) 田中比呂志「地域社會の構造と變動」飯島涉・久保亨・村田雄二郎編『シリーズ二〇世紀中國史』第二卷、東京大學出版會、二〇〇九年、四二―四五頁。
- (2) 同上書、四八頁。
- (3) 宮内肇「廣東地方自治研究社と清末廣東地方自治」『現代中國研究』第一九號、二〇〇五年三月、五九頁。
- (4) 同「清末廣東、地域エリートの人的關係」廣東地方自治研究社順德縣出身社員を例に「海港都市研究」第二卷、

- 二〇〇七年三月、九七一九九頁。
- (5) 蒲豊彦「宣教師、中國人信者と清末華南鄉村社會」『東洋史研究』第六二卷第三號、二〇〇三年十二月、三四一—六二頁。
- (6) 「宣教師の見た近代中國社會」『歴史と地理』六七四號、二〇一四年五月、三三—三六頁。
- (7) 本稿執筆のきっかけとなったのは宮内肇氏からうけた教示である。謹んで謝辭を述べたい。
- (8) ホックンコレクシヨンにおけるマクニール日記の所載状況は次の通りである（括弧内は請求記號）。November 8, 1903 to August 7, 1905 (MS-1007-009/003), August 1, 1905 to September 27, 1905 (MS-1007-006/009), September 27, 1905 to January 15, 1906 (MS-1007-006/009), January 1, 1906 to January 4, 1910 (MS-1007-006/010), April 1, 1910 to December 31, 1910 (MS-1007-006/011), January 1, 1911 to December 18, 1911 (MS-1007-006/012). なお、マクニールがニュージールランドに一時歸國中の記載に関しては本稿では考察の対象としていない。
- (9) 拙稿「清末在外中國人と中國キリスト教布教事業：在ニュージールランド中國人と廣州鄉村布教團を中心に」『東洋學報』第九十四卷第三號、二〇一二年十二月、六三—九四頁。
- (10) Matthew Dalzell, "The Social Missions: The Canton Villages Mission," *New Zealanders in Republican China, 1912-1949*, Auckland: The University of Auckland, 1995, pp. 86-88.
- (11) 花縣地方志編纂委員會編『花縣志』廣州：廣東人民出版社、一九九五年、一頁。
- (12) 『花縣志』光緒十六年刊、卷之一、建置。
- (13) 孔昭度ほか編『民國花縣志』上海：上海書店出版社、二〇〇三年（一九二四年初版）、卷二、輿地志、一四頁（影印版の頁數による）。なお、本来であれば徐氏内部の人間關係について考察を加える必要がある。しかし、本稿で用いた史料からは徐氏内部の様子についてうかがうことは出来なかつた。他日に期したい。
- (14) 畢氏の存在には、C.V.M.の宣教師たちもしくは關心をよせつゝた J. Mawson, "Canton Villages Mission: Miss Mawson at Work," *The Outlook*, July 11, 1908, p.13. G. H. McNeur, "C. V. M.: The "Daily Renewal" School," *ibid.*, May 22, 1909, p. 12)。マクニールによれば、張之洞が兩廣總督時代に花縣の鑛山開發をすすめたが、畢氏の反撥によって鑛山が閉鎖されたという。
- (15) 徐鎮益『苦心救國滅滿清』出版地不明：出版者不明、一九三〇年、二一—五頁。
- (16) 同上書、五一—六頁。一九〇二年の早魃は花縣地方志編纂委員會編（前掲書、一八頁）にみえる。
- (17) 孔昭度ほか編、前掲書、卷八、選舉表、六六一—七一頁。
- (18) 西川喜久子『珠江デルタの地域社會：清代を中心として』西川喜久子、二〇一〇年、七五一—七六頁。
- (19) 菊池秀明『清代中國南部の社會變容と太平天國』汲古書

- 院、二〇〇八年、一三〇頁。
- (20) 廣東省花縣僑務辦公室編『花縣華僑志』出版地不明：出版者不明、一九九三年、四一九頁。
- (21) 庾熙光「花縣基督教簡介」政協花都市文史資料研究委員會編『花縣文史』第十四輯、花都：出版者不明、一九九四年、八〇—八二頁。なお、この地域には清代にカトリック信者が二〇〇人あまり存在していたというが、その後活動を確認できなくなっていたと云う。
- (22) *Report of the American Presbyterian Mission, Canton, China, for the Year 1896*, Hongkong: The 'China Mail' Office, 1896, p. 26
- (23) *Report of the American Presbyterian Mission, Canton, China, for the Year Ending October, 1901*, Hongkong: The 'China Mail' Office, 1901, p. 15.
- (24) *Ibid.*, p. 16.
- (25) James Ng, *Windows on a Chinese Past*, vol. 2, Dunedin: Orago Heritage Books, 1995, p. 192.
- (26) *Ibid.*, p. 199.
- (27) *Ibid.*, p. 201.
- (28) McNeur, "Report on Work of the Canton Villages Mission in China for Year Ending June 30, 1904," Foreign Missions Committee: Annual Reports: Canton Villages Mission, 1904, 1908-1910. (AA 7/5/3) 以下、括弧内にノックスカレッジ附属長老會研究センター所藏史料の各ファイルに記載された請求番號を表記する。
- (29) W. Mawson, "C. V. M.: Ko T'ong Hospital Opened," *The Outlook*, July 24, 1909, pp. 11-12.
- (30) G. H. McNeur, "Dr. Ings's Death," *The Outlook*, October 6, 1906, pp. 9, 11.
- (31) William Mawson, *Work and Workers in the Canton Villages*, Dunedin: The Orago Daily Times and Witness Newspapers Company, 1905, p. 4.
- (32) 廣東省花縣僑務辦公室編、前掲書、一七二頁。
- (33) 孔昭度ほか編、前掲書、卷三、建置志、二七頁。
- (34) 浩之「越境する身體の社會史：華僑ネットワークにおける慈善と醫療」風響社、二〇一五年、九四—一四四頁。
- (35) 花縣新華鎮志編纂辦公室編『新華鎮志』花縣：花縣新華鎮志編纂辦公室、一九八九年、三二八頁。
- (36) 徐頁「公益小學史話」政協廣東花都市文史資料研究委員會編『花都文史資料』第一九輯、花都：出版者不明、一九九九年、一九四—一九五頁。
- (37) 廣東省花縣僑務辦公室編、前掲書、一七三頁。徐と黃花崗起義の関係については、諸史料を用いて整理する必要があるため、本稿では指摘することとせらる。
- (38) 同上書、一七三頁。
- (39) 同上書、一七三頁。
- (40) 同上書、一七四—一七五頁。
- (41) 原文：Lay down in afternoon but crossed after 10 min nap to go & see two Chinese. One was Tsui Kam T'ong's brother, the other was a Fa Yuen man dressed in foreign

- clothes, who had been in New York, returning some years ago. Says he wishes to have a Gospel Hall opened in his village. Has not yet himself been baptized & seem to be a man without any fixed purpose in life. His name is Ts'ui Mo Kwan [...]. His village in Fa Yuen is Saan Wa Tin Village 三華店村 沙埗莊 Sha Lit Chong. [日記原文に漢字表記あり]
- (42) G. H. McNeur, "C. V. M.: The "Daily Renewal" School," op. cit.
- (43) "A letter from Mawson to Hewitson," March 18, 1908. Foreign Missions Committee: Convener's Inwards Correspondence 1902 to 1910 (AA 16/2/7).
- (44) 徐茂均が洗禮を受けた正確な日時は明記されていないが、筆者は一九〇四年だと考えている。その理由の1つは、一九〇四年二月に徐がマクニュールに會うに行つたと、彼は洗禮を受けていなかったとしてゐるためである (G. H. McNeur, "C. V. M.: The "Daily Renewal" School," op. cit.)。もう1つは、徐がアメリカ長老會ミッションのフルトンから洗禮を受けたことが日記で明らかにされているためである (Apr. 12, 1906. [Ts'ui wai] [b]aptized later by Mr. Fulton)。以上二點から、徐は一九〇四年一月にマクニュールと接觸した直後にフルトンから洗禮を受けたと判断される。
- (45) G. H. McNeur, *ibid.*
- (46) G. H. McNeur, "C. V. M.: The "Daily Renewal" School," op. cit.. 原文: The work done was such that confidence was inspired, and the second year saw a big increase in pupils.
- (47) 吉澤誠一郎『愛國主義の創成: ナショナルリズムから近代中國をみる』岩波書店、二〇〇三年、五四―八二頁
- (48) 同上書、八二、八三―八六頁。
- (49) 「某學生語語痛心」『廣東日報』一九〇五年六月九日、一面。
- (50) 「教士於美禁華工之感情」『廣東日報』一九〇五年六月十三日、二面。「教會對於美約之辦法」同、一九〇五年七月四日、二面。「教會公函之特色」同、一九〇五年八月二十三日、一面。
- (51) Ryan Dunch, *Fuzhou Protestants and the Making of a Modern China 1857-1927*. New Heaven: Yale University Press, 2001, pp. 55-57.
- (52) 新寧黃梓材「美國政治家與宗教家之對待華人」『廣東日報』一九〇五年八月二十四日、一面。この投稿は、ボイコット運動に乗じて宣教師や教會施設への被害が発生し賠償金を支拂うことになれば、中國がさらに弱體化してしまうという懸念を述べている。
- (53) 孔昭虔ほか編、前掲書、卷五、學校志、五一―五二頁。
- (54) W. Mawson, "C. V. M. Notes," *The Outlook*, June 13, 1908, p. 13. この殺傷事件後、政府は兩龍墟に科した罰金を用いて、一九〇七年に學堂創建にこぎ着けた。地方志を認める限り、マクニュールが指摘する「高等學校(學堂)」

- とは「悅賢公立高等小學」と思われる（孔昭度ほか編、前掲書、卷五、學校志「五一—五二頁」）。
- (55) 孔昭度ほか編、前掲書、卷五、學校志「五一頁」。
- (56) Lawrence D. Kessler, *The Jangyin Mission Station: An American Missionary Community in China, 1895-1951*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1996, p. 37.
- (57) 蔣祖緣『簡明廣東史』廣州：廣東人民出版社，二〇〇八年，五一—五二頁。
- (58) 花縣地方志編纂委員會編、前掲書、一九頁、孔昭度ほか編、前掲書、卷三、建置志、三〇頁。
- (59) 「鐵路與鄉渡之關係」『廣東日報』一九〇四年八月三日、一面。原文：粵漢鐵路：將來經越番禺縣慕德里司屬高塘人的一帶、現初勘築路基、無知愚民、竟謂洋人意欲佔地、鄉先生之膠固者、亦心頗惡之、以故鄉民莫不仇視鐵路、茲聞各鄉渡日內互為停擺云〔後略〕。
- (60) 「北路築路之風潮」『廣東日報』一九〇四年十月十九日、二面。原文：番禺慕德里司高塘附近龍護頭村、向有小河、接連金溪石門一帶海道、藉資灌溉、鄉人即就河上建築木橋、以便來往。現當興築鐵路、該橋為路軌所必經、工程司擬將原有木橋拆去、「中略」改作鐵路「中略」、「該鄉人等」連日紛紛架大炮于道中、聲言倘開工填塞該河、伊等即發炮轟擊等語、路局人員、恐成禍變、只得暫停填塞、照會番禺縣辦理、昨初八日柴令已親往履勘、傳紳者■（一字刊讀不能）等、妥為開導。
- (61) Wm Mawson, "C. V. M. Extension: Messrs McNeur [McNeur] and Mawson in Fa District," *The Outlook*, March 25, 1905, p. 14.
- (62) 「花縣路線之問題」『廣東日報』一九〇四年五月十四日、一面。原文：乃昨有該縣附生徐炬熒等、以屬內路改害深、請飭依初勘興築事、赴稟督轅、隨奉岑督批示、謂据花縣三華村、擬定鐵路界址、經三次測勘、改線、最為直捷無碍、「中略」、頗於田廬、墳墓、出入道路有妨、是否屬實、應否仍照初勘以順輿情、仰鐵路工程購地兩局、會同花縣及洋工程師、密地確細查勘、妥商核辦具報。類似的報道は「花縣路線之請改」〔『廣東日報』一九〇四年七月二十一日、二面〕にもみられる。
- (63) 「留心路權之鄉人可嘉」『廣東日報』一九〇四年十月二十五日、一面。
- (64) "C. V. M. Annual Report: 1908-9." *Foreign Missions Committee Annual Reports: Canton Villages Mission*, 1904, 1908-1910 (AA 7/5/3).
- (65) William Mawson, "C. V. M.: A Day in the Fa District," *The Outlook*, June 13, 1908, pp. 13-14.
- (66) Dunch, op. cit., pp. 49-55.
- (67) 來新夏「試論清光緒末年的廣西人民大起義」『歷史研究』一九五七年一一期、五六—七七頁。
- (68) 「署兩廣總督岑春煊奏廣西全省一律肅清折（光緒三十一年九月初一日）」『辛亥革命前十年間民變檔案史料』下冊、北京：中華書局、一九八五年、六〇四—六〇八頁。

- (69) 「試看喜字勇之能用否」『廣東日報』一九〇四年七月二十七日、二頁。この記事では、花縣に駐留していた喜字營五〇〇人が省城に移動したことを指摘している。廣西省での叛亂鎮壓に出兵するためと思われる。
- (70) 「吾粵將大舉清鄉之消息」『廣東日報』一九〇四年十二月二十九日、一頁。
- (71) 「署兩廣總督岑春煊奏廣東歷年辦理清鄉情形折(光緒三十二年五月二十八日)」『辛亥革命前十年間民變檔案史料』下冊、四五三—四五五頁。
- (72) G. H. McNeur, "C. V. M.: A Holiday and a Village Tour." *The Outlook*, December 15, 1906, pp. 11-12. 原文: I believe the district is in a more satisfactory state now than it has been during my five years of conning and going.
- (73) Mawson, "C. V. M.: Among the Villages with the Camera." *The Outlook*, June 8, 1907, p. 12. 原文: After trial, 47 were executed at Ko-Tong, and a still larger number in the Fa District.
- (74) G. H. McNeur, "C. V. M.: A Holiday and a Village Tour." op. cit. 徐茂均の各報中(下)の「日記」記事の回答が一致している。
- (75) 原文: Ts'ui Mo Kwan in. Plague in his village & school closed for a while. Large body of soldiers in Fa Yuen dispersing Triad. Say 40 soldiers were killed between in first encounter at Paak P'o Fai. Two teachers of Leung Lung hok tong were butchered by Triads.
- (76) 花縣地方志編纂委員會編、前掲書、一九頁。
- (77) 何文平『變亂中の地方權勢：清末民初廣東の盜匪問題與社會秩序』桂林：廣西師範大學出版社、二〇一一年、一五八頁。
- (78) 同上書、一六五—一七六頁。
- (79) G. H. McNeur, "C. V. M.: Mr. McNeur at Ko-T'ong Market." *The Outlook*, August 11, 1905, p. 11.
- (80) "Canton Villages Mission: Report for the Year Ending June 30, 1907." *Proceedings of the General Assembly of the Presbyterian Church of New Zealand*, Dunedin: Otago Daily Times and Witness Newspapers Company, 1907, p. 113.
- (81) W. Mawson, "C. V. M.: June 1908: In Fa District." *The Outlook*, October 10, 1908, pp. 11-13.
- (82) [Minutes of Winter Conference], February 8, 1908, Foreign Mission Committee Mission Council Minutes 1903-1911(AA 7/8/2) p. 2.
- (83) Annual Conference, February 5, 1908, p. 3 (AA 7/8/2).
- (84) No title [A letter from Mawson to Convent], March 15, 1908. (AA 7/8/2).
- (85) C. V. M. Financial Report for the First Quarter, 1909, April 7, 1909 (AA 7/8/2).
- (86) "Annual Report for Year Ending June 30, 1909." *Proceedings of the General Assembly of the Presbyterian Church of New Zealand*, Dunedin: Otago Daily Times and

- Witness Newspapers Company, 1910, p. 114.
- (87) "Minutes of Quarterly Meeting." April 7, 1910, p. 1 (AA 7/8/2).
- (88) "Annual Report for Year Ending June 30, 1909." op. cit., p. 119. 第二章で整理したより月新女子校は一九一〇年に開校したとみられるが、マシモン史料では一九〇九年に開校したとみられる。
- (89) Rebecca Weir, "Sowing the Seeds of Opportunity: The cultural encounters between Canton Villages Mission missionaries and local Chinese," Master Thesis for degree of BA (Hons) in History, the University of Otago, 2010, p. 50.
- (90) A letter from Mawson to Convenser, March 15, 1908, op. cit. 原文: It is to develop and increase the efficiency of this school that he is now seeking our co-operation.
- (91) 原文: Dr. Selden says he studied medicine for a little, but could not settle down to work
- (92) Weir, op. cit., p. 40.
- (93) 原文: Talk with Mr. Tsui after. He offers \$1000 if we build a hospital at Sha Luet.
- (94) "Minutes of Quarterly Meeting." April 7, 1910, p. 3, op. cit.
- (95) 原文: Tsui very anxious for Hospital Glad he has dropped the hospital scheme in the meantime.
- (96) 原文: Altogether examined 35 candidates[,] the largest number at any of our station at one time. イマニエールの改宗者リストからは、一九〇九年六月十九日から二十日にかけて、三十四人の洗禮希望者が試験を受けたことが分かる。この人数はイマニエールの日記の記述の裏付けとなる ("Registers of Converts" (MS-1007-001/015))。
- (97) 原文: Tsui MK talking about our closing the door of the Kingdom because we keep candidates waiting so long for baptism. Explained to him that "More hurry less speed" held good here.
- (98) 原文: Explained that a foreigner's interference would not be at all wise.
- (99) 原文: Evidently Ah Lau had been partly in the wrong [...]、アライビチは、"Foo Leng" と表記されたより、文脈から "Fu Leng" と同一と判断した。
- (100) G. H. McNeur, "Notes on Autumn Communion Trip," *The Outlook*, January 8, 1910, p. 13.
- (101) Mawson, "Fa District: Annual Report 1911-1912." Foreign Mission Committee Annual Reports, Canton Villages Mission 1911-1912 (AA/7/5/4). 原文: So vigorous is Mr.[...] Tsui's Christian teaching that in alarm they actually opened two Confucian schools in order that their boys might be trained in the old way.
- (102) W. Mawson, "Fa District: Report for year ending June 30, 1912" (AA/7/5/4).
- (103) 花縣地方誌編纂委員會編『前掲書』110頁。

- (104) 花縣新華鎮志編纂辦公室編、前掲書、七頁。
- (105) 『傳教士與近代中國』上海：上海人民出版社、一九八一年、二五一頁。李若文「清末中國、歐米宣教師による干預訴訟の問題の側面―プロテスタントの對應策を中心に」『東洋學報』、第七六卷第一・二號、一九九四年十月、六〇―六一頁。同様の指摘は蒲豐彦、前掲論文（二〇〇三年）、五四頁にも見える。
- (106) 清郷とキリスト教會の關係は一九世紀の潮州でもみられた。しかし、三華店村の場合は、身を寄せるべき教會が地域に存在せずに、徐茂均の主導でミッションが引き入れられたという點こそが特徴的だった（蒲豐彦、前掲論文（二〇〇三年）、四〇―四三頁）。
- (107) 鐵道利權回收と廣東自治研究社指導層の關係については、宮内肇にも指摘されている（同、前掲論文（二〇〇七年）、九二―九四頁）。
- (108) 蒲豐彦「地域史のなかの廣東農民運動」狹間直樹編『中國國民革命の研究』京都大學人文科學研究所、一九九二年、二三―三五頁。

附記 本研究はJSPS科研費25・9671の助成を受けたものである。

*Qingzhang in the Wanli Era* 萬曆 9 年清丈 27 都 5 圖歸戶親供冊 in the Anhui Museum (No. 2: 24582; hereafter, *Guihuqingongce*), which records the complete information on the land ownership of all the people of 27 *Du* 5 *Tu* in Xiuning Prefecture, and the *Dezi zhangliang baobo*, I examine the contents of the *Guihuqingongce* 歸戶親供冊 and the *Dezi zhangliang baobo* regarding the distribution of land ownership in the *huangce* of 27 *Du* 5 *Tu* in Xiuning Prefecture of Huizhou in the Wanli era. My analysis makes it clear that the people of 27 *Du* 5 *Tu* possessed over 90% of the lands within 27 *Du* and that almost all of those who owned the lands of 27 *Du* 5 *Tu* were people that lived either within 27 *Du* or their neighboring *Du*. This distribution of land ownership, thus, supports the understanding that until the dissolution of Lijia 里甲 system, the *Du* 都 (in the case of the Jiangnan Delta, the *Qu* 區 based on *Du*) was the zone of life for ordinary people.

## MISSIONARY DOCUMENTS AND REGIONAL SOCIETY OF THE ZHUJIANG DELTA, GUANGDONG

DOI Ayumu

At the end of Qing Period, local elites had widened their spheres of activity. Previous studies have paid much attention to the relationship between traditional local elites and provincial assemblies or the self-government movement. However, because of the limitation of sources, most researchers have paid less attention to the activities of non-elites in rural districts. Hence, this study employs source materials from the Canton Villages Mission 廣州鄉村傳道團 on Sanhuadian village 三華店村, in Hua Xian (Fa Yuen) 花縣, which was located in the northern district of Canton City, and on Xu Maujuan (Ts'ui Mau Kwan) 徐茂均, who had returned from abroad, to verify the way non-elites in a rural district dealt with local reconstruction for the modern world during the last decade of the Qing dynasty.

Xu had lived abroad for a lengthy period and lamented the weakness and decline of his own country, and when he returned to China, he indicated a strong interest in the doctrines of Christianity. He tried under Christian influence to introduce modern education in Sanhuadian village, but the villagers displayed no immediate interest in Xu's activities. However, it appears that the positive role of missionaries and Chinese Christians in the Anti-American Boycott Movement

turned their attention to Xu's educational work. And, the opening of the Canton-Hankow Railway enabled Xu to solidify his foothold in the rural district.

However, the deterioration of public order, the local government's response, as well as the plague pandemic, led to the temporary closing of Xu's school. There was a limit to what Xu could do on his own to keep the school operating. For this reason, Xu approached the Canton Villages Mission and secured their "co-operation" to expand the schools in Sanhuadian village. As a result of this development, the rapid modernization stemming from the acceptance of the Christian missions and Xu's own involvement in disputes over popular education brought about serious conflicts with neighboring villages. These conflicts contributed to the large-scale destructive lineage feuds with neighboring villages during 1910s.

Through this inquiry, we have been able to confirm the fact that Xu's non-elite activities in a rural district co-existed with those of local elites operating in the provincial assembly to revive the region.